様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　８ 月 １９ 日現在

機関番号：１８００１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2020
課題番号：１６Ｋ２０８２２

研究課題名（和文）統合失調症患者を抱える家族の心的トラウマへの認知行動療法の効果検証

研究課題名（英文）Inspection of the effectiveness of cognitive behavioral therapy for psychological trauma of schizophrenia patients' family members

研究代表者
高原　美鈴（TAKAHARA, MISUZU）

琉球大学・医学部・助教

研究者番号：６０５２２１９１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：　統合失調症患者を抱える家族を対象に，患者の急性期精神症状にともなう心的外傷体験に焦点をあて，質問紙調査と半構造化面接を実施し，生活技能訓練（Social Skills Training，以下SST）を活用した介入効果検証を試みた．半構造化面接の分析では精神保健に携わる医療者は家族員個々の思いを考慮した家族支援の必要性が示された．SST実施前後の分析結果では，家族が患者との関わりに対して肯定的な感情が生じることや介護上の負担感が軽減することなどが示された．
　本介入は，統合失調症患者と家族の療養および生活環境の改善を図るうえで重要なプログラムであることが示唆された．

研究成果の学術的意義や社会的意義
統合失調症患者家族の半数以上にPTSDの可能性があり，患者の受け入れ意識にも影響することや介護上の困難・負担感や抑うつ・不安などのストレス反応と関連することが報告されている．本研究は，こうした統合失調症患者を抱える家族の思いをインタビューし，SSTを活用した介入効果検証を行い，統合失調症患者家族の対処能力を向上させるための効果的な介入技法やプログラムを明らかにした．本研究の知見は，患者の長期入院や社会的入院の防止に資する重要な資料となるため，社会的意義は大きい．

研究成果の概要（英文）：By conducting surveys and semi-structured interviews targeting family members of schizophrenia patients, with a focus on psychological traumatic experiences that accompany acute psychiatric symptoms in the patient, we attempted to measure the effectiveness of interventions that apply Social Skills Training (SST). Based on the analysis of semi-structured interviews, the necessity of familial support, taking into consideration each individual family member's thinking, for medical workers engaged in mental health, was demonstrated. Based on analysis of the results before and after the implementation of SST, it was shown that an affirmative sentiment towards interactions with the patient was developed among family members, and the sense of burden from providing care was reduced. The results suggest that this intervention, by aiming to improve the treatment and living environment for schizophrenia patients and their family members, is an important program.

研究分野：精神看護学

キーワード：統合失調症　生活技能訓練　心的外傷後ストレス障害　家族

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本の精神保健医療福祉は，長期にわたり入院医療中心であったが，2004 年に厚生労働省より「入院医療中心から地域生活中心へ」という障害保健福祉施策が示され，入院医療中心の精神医療から，精神障害者の地域生活を支えるための精神医療へと施策の方向性が示されている [1]．こうした基本方策が掲げられて以降，精神疾患患者の地域生活を支える体制づくりの重要性は高まっている．しかし，精神疾患患者とその家族を取り巻く現状は，家族との同居が前提であり [2-3]，患者を支える家族の負担は大きく，極めて厳しい状況である．

統合失調症と心的外傷後ストレス障害（post-traumatic stress disorder，以下 PTSD）に関連した先行研究では，患者の精神症状悪化時の幻覚や妄想状態にともなう急性期の症状が家族の PTSD の発症に関与することや，統合失調症患者家族の半数以上に PTSD の可能性があり [4]，患者の受け入れ意識にも影響することが報告されている [5]．宮城ら [6] の統合失調症患者を抱える家族を対象にした報告では，患者の急性期症状に伴う心的外傷が，介護上の困難・負担感や抑うつ・不安などのストレス反応に影響している可能性を示唆している．しかし，わが国においては統合失調症患者家族の PTSD に関連した心的外傷に関する研究は端緒についたばかりであり，こうした患者の精神症状にともなう家族の心的外傷の存在は，患者の長期入院や社会的入院を助長する大きな要因となる可能性が考えられ，取組むべき重要な課題である．

こうした現状から，統合失調症患者およびその家族の対処能力を向上させ，症状のマネージメントを行えるよう援助することは，精神医療が病院や施設から地域主体と変化している今日，とりわけ有用な介入的アプローチとなる．統合失調症患者家族の対処能力を向上させるための介入技法としては，生活技能訓練（Social Skills Training，以下 SST）や自己対処能力を高めるエンパワメント，アサーティブ・コミュニケーショントレーニング（Assertive Communication Training，以下 ACT）プログラムなどの心理教育や認知行動療法的技法があげられる．なかでも SST は対象者の特性に応じて柔軟に適応することができる援助技法とされている [7]．これまで精神科領域における家族への心理教育として，SST による介入報告は散見されるが，患者の急性期精神症状にともなう家族の心的外傷に焦点をあてた介入研究は寡聞にしてみあたらない．本研究における SST による援助技法の介入効果を明らかにすることにより，統合失調症患者を抱える家族の認知の矯正を測り，介護上の困難・負担感の軽減およびストレス耐性能力の軽減に寄与することが期待できる．

２．研究の目的

本研究では，沖縄県の精神科病院の家族会へ参加している家族に対して質問紙調査，半構造化面接を実施し，さらにフォーカスグループインタビュー（Focus Group Interview，以下 FGI），SST を実施することにより，家族の自己対処能力を高め行動変容を獲得し，家族の心的外傷の問題解決の方策に資することを目的とする．

３．研究の方法

精神科病院に入院・通院している統合失調症患者の家族を対象に調査を実施した．統合失調症患者家族の心的外傷に及ぼす SST の介入効果について検証するため，質問紙調査は Impact Event Scale-Revised（以下 IES-R）[8] と家族の主観的困難度・負担調査票である Family Burden and Distress Scale（以下 FBDS）[9] を使用した．また，家族の患者への対処能力を測定するために Kikuchi’s Social Skill Scale: 18 items（以下 KiSS-18）[10] を使用した．半構造化面接では対象者に家族の病気の経過や心理的な負担・困難感などについて自由に語ってもらい，一人約 60～90 分間面接を実

施した．次に，同意の得られた対象者に対して，FGI を実施し対象者の介護上の悩みや苦悩などの介護負担について系統的に抽出し，SST の課題の決定を行った．SST の実施の際に，FGI で選定された課題に応じたロールプレイを 10 回実施した．SST 実施後，再度 FGI を実施し介護負担や心的外傷，不安・ストレスの変化や介入効果に関して系統的に抽出し，質的帰納的分析を行うとともに，統計手法による分析も含めた多面的な検証を行い，SST の効果について評価する．

本研究は，琉球大学臨床研究倫理審査委員会（承認番号 866 変更 2）および A 精神科病院倫理審査委員会で承認を得て実施した．

４．研究成果

（１）統合失調症を患う息子の診断前から現在における経過のなかで，母親は息子の言動や急性期症状など変化する病態にどのような姿勢で対応してきたのかを明らかにすることを目的として調査を実施した．研究協力者は男性統合失調症患者の母親 8 名で，その平均年齢は 70 歳であり，主な職業は専業主婦であった．研究協力者の息子の平均年齢は 43 歳で，精神病未治療期間（Duration of Untreated Psychosis；以下 DUP）は，平均 5.3 年，罹病期間は平均 20 年であった．調査時点で入院中の息子は 3 名であった．面接時間は平均 102 分であった．調査への同意が得られた対象者に対して，半構造化面接を実施し，逐語録データを M-GTA を用いて継続的比較分析を行った．

統合失調症を患う息子に対応する母親のケア意識の変容プロセスは，【病的言動への対応と孤立】,【継続する治療の中で繰り返す再燃に耐える】,【息子と共に生きる覚悟と希望】の 3 つの相互関連を中心に構成されていた．本研究から，母親は息子の不可解な言動に暗中模索しながら一人で対応しており，ようやく専門医につながりながらも，攻撃的言動は続き，繰り返す症状の再燃に耐えていた．母親は長い経過を経て，会得した対応への自信とありのままの息子を受容し，家族や仲間の支えによって，息子と共に生きる覚悟と希望を見出すプロセスが明らかとなった．以上のことから，精神保健に携わる関係者は未治療期間の困難な状況を理解し，地域社会への適切な情報提供および精神科にアクセスしやすい環境を整備するとともに，医療につながった患者家族へのケアおよび家族会参加などを促すアプローチの必要性が示唆された．

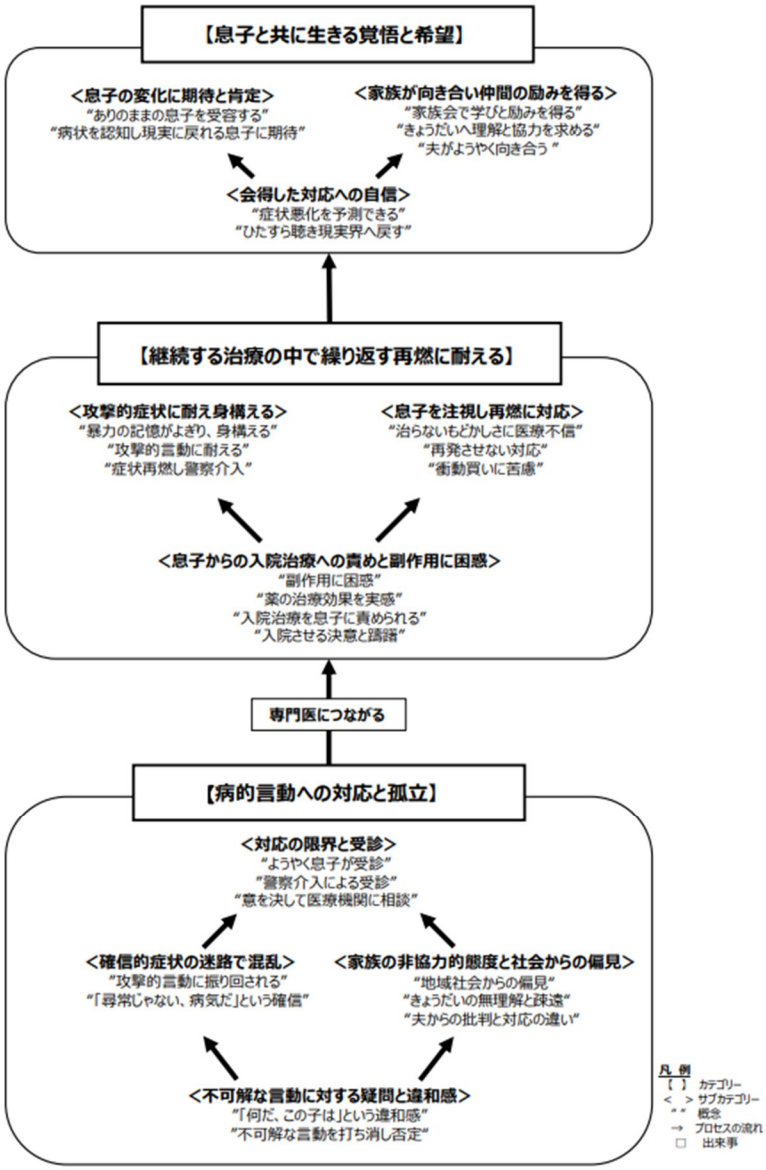

Fig.1 Changes in awareness among mothers in relation to caring for their schizophrenic sons

（２）男性統合失調症患者の父親に着目し，統合失調症を患う息子の診断前から現在における経過のなかで，息子の言動や急性期症状など変化する病態にどのように対応してきたのかを明らかにすることを目的とした．研究協力者は，男性統合失調患者の父親 4 名で，平均年齢 76 歳であった．研究協力者の息子の平均年齢は 44 歳であり，精神病未治療期間は平均 8.5 年，罹病期間の平均年数は 18 年であった．調査への同意が得られた対象者へ半構造化面接を実施し，逐語録データを M-GTA を用いて継続的比較分析を行った．分析の結果，統合失調症の息子をもつ父親の対応意識の変容プロセスは，【違和感を打ち消す】，【攻撃的暴力に切羽詰まる】，【治療に対する不信と困惑】，【向き合う家族の葛藤】，【自責の念と責任】，【病気と共にある生活】という 6 つのカテゴリー間の相互関連を中心に構成されていた．

統合失調症の息子をもつ父親は，息子の治療に対する不信や困惑を抱きつつ，息子の要求に苦慮し，家族内の意見の不一致や追い詰められる家族の人権に葛藤し，時には一歩引く冷静な対応で息子へ関わっていた．さらに，母親任せであった子育てに対する後悔の気持ちを持ちながら，息子を支える覚悟と責任を強く感じており，母親とは異なる自責の念と責任を背負っていたことが明らかとなった．以上のことから，精神保健に携わる医療者は父親や母親など家族員個々の思いを考慮した家族支援が必要だと考える．

（３）統合失調症患者の家族会における SST の有効性を明らかにすることを目的とし、研究協力が得られた家族 8 名を分析対象とし質的帰納的分析を行った．対象者の平均年齢は 69.5 歳であり，続柄は父親や母親，きょうだいであった．患者の統合失調症治療歴は 10 年以上であった．カテゴリーを【 】，サブカテゴリーを『 』で示す．分析の結果，１つめに『病気の症状としての理解』，『苦悩の吐きだし』，『自分自身が癒され，心のやすらぎを感じた』のサブカテゴリーから【家族会へ参加したことで安心感を得た】が抽出された．２つめに『自分の変化に気づく』，『自分と患者を分けて考える』，『気持ちに余裕ができた』のサブカテゴリーから【自分自身の認知の変化に気づく】が抽出された．３つめに『患者に言葉かけをしやすくなった』，『学んだことを実践し効果を実感』，『患者の状況や疾患への理解の進展』のサブカテゴリーから【対応方法を実践しての効果を実感する】が抽出された．

本介入は，家族と専門職が協働でプログラム構成を検討し，SST を７カ月間継続し 10 回実施したことで参加者間の相互作用が多くみられ，家族の患者への認知や対応行動に変化をもたらしたことが示された．また，家族自身の心の負担を軽減させ，家族のリカバリーが始まったと考えられる．以上のことから，SST は同じ経験のある家族との相互交流の場である家族会において有効な介入方法と考える．

（４）今後の研究の推進方策は，質問紙調査の結果の分析と，SST 実施前後の FGI の質的帰納的分析を行い，これまでの知見を含めた包括的な報告を行う予定である．以上の取組みで得られた知見を学術学会等で発表する予定である．

＜引用文献＞

1) 厚生労働省: 精神保健医療福祉の改革ビジョン.
2) 田上美千佳: 精神分裂病患者をもつ家族の心的態度 第 1 報 CFI の検討を通して. 日本精神保健看護学会誌 6(1): 1-11, 1997.
3) 厚生労働省: 患者調査 平成 26 年 精神病床退院患者の退院後の行き先. 2014.

4) Loughland C.M., Lawrence G., Allen J., Hunter M., Lewin T.J., Oud N.E., Carr V.J.,：Aggression and trauma experiences among carer-relatives of people with psychosis. Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology 44：1031–1040, 2009.

5) 梶谷康介，中島竜一，梶原雅史，飯野芳子，小方万紀子，大本秀代，井上雅之，佐々木裕光，神庭重信：長期入院統合失調症患者の家族の精神健康度‐PTSD の観点から．精神医学 50：169-172，2008.

6) Tetsuya Miyagi, Takehiko Toyosato, Misuzu Takahara, Takao Yokota: Psychological trauma among family caregivers of individuals with schizophrenia in relation to their subjective care burden, distress and stress response. 琉球医学会誌 33(1-3): 2014.

7) 土屋徹：実践 SST スキルアップ読本．精神看護出版，2004.

8) Asukai N，Kato H，Kawamura N，Rim Y，Yamamoto K，Kishimoto J，Miyake Y，Nishizono Maher A：Reliability and validity of the Japanese-language version of the Impact Event scale-Revised (IES-R-J) ： Four studies of different traumatic events. Journal of Nervous and Mental Disease 190：175-182, 2002.

9) 山口一，高橋彰久，白石弘巳，高野明夫，小島卓也：家族の主観的困難度・負担調査票の作成と信頼性・妥当性の検討--統合失調症患者の家族を対象として．臨床精神医学 35(4)：449-456，2006.

10) 菊池章夫：また思いやりを科学する－向社会的行動の心理とスキル－．川島書店，1998.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 髙原美鈴，古謝安子，宮城哲哉，髙原大介，豊里竹彦，與古田孝夫	４．巻 38(1-4)
２．論文標題 統合失調症を患う息子に対応する母親のケア意識の変容プロセス	５．発行年 2019年
３．雑誌名 琉球医学会誌	６．最初と最後の頁 73～82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 Misuzu Takahara, Yasuko Koja, Tetsuya Miyagi, Daisuke Takahara, Takehiko Toyosato, Takao Yokota
２．発表標題 The Effectiveness of Social Skills Training (SST) in "Family Associations" of Schizophrenia Patients From an Analysis of Focus Group Interview Data
３．学会等名 The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science, Japan（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Misuzu Takahara , Tetsuya Miyagi , Takehiko Toyosato , Yasuko Koja , Takao Yokota
２．発表標題 The changes in the fathers' awareness about their schizophrenic sons
３．学会等名 The 50th Asia Pacific Academic Consortium for Public Health, Malaysia 2018.（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Misuzu T, Tetsuya M, Yasuko K, Takehiko T, Takao Y
２．発表標題 The Process of a Mother’s Response to Psychiatric Symptoms in Schizophrenic Patients and the Experience of Family Life
３．学会等名 TNMC & WANS International Nursing Research Conference 2017, October 20-22, 2017（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関